『馬琴日記』と〈異国〉

—江戸後期の日常がはぐくむ〈異世界〉への探究心—

金　学淳

1. はじめに

曲亭（滝沢）馬琴が日々の出来事を書き留めた『馬琴日記』[1] は、個人の内面的な感情や感想を記した〈日記〉とは性質が異なる〈備忘録〉的な記録である。馬琴は、活発な著作活動の合間に、現在のメモ書きのような形式で、身辺に起きた出来事をこまめに書き残している。そこには馬琴個人はもちろん、家族全員の日常生活まで記録されている。柴田光彦が、『馬琴日記』について「馬琴個人の日記というより滝沢家の記録というべきもので、現存日記の裏表紙のすべてに「滝沢」とある」[2] と述べているように、この『馬琴日記』は馬琴個人というよりも滝沢家の記録であると言えよう。

『馬琴日記』には、天候、読本や合巻の執筆過程、原稿料、訪問者、自分や家族の健康状態、薬などといった日常生活がありのままに書かれている。しかし『馬琴日記』からは、それだけではなく、創作を支える馬琴の知的関心のあり方もまた読み取れる。そこに見えるのは、日常の出来事の中に未知の世界を見出そうとする馬琴の姿勢である。『馬琴日記』を改めてそのように捉え返してみると、日記には鎖国下の幕府の情報統制下において、馬琴が積極的に未知の世界、つまり異国を探し求めた知的好奇心がうかがえる。とはいえ、そのような馬琴の努力が反映された作品は、ほとんどないのが実情である。これは、馬琴の知的好奇心のあり方と、作家としての姿勢が別のものであったからだと思われる。

馬琴の異国を舞台にした作品は少ないものの、『椿説弓張月』（文化4年〈1807〉～同8年〈1811〉）においては、例外的に異国像が積極的に取り込まれて

いる。この作品における異国について、筆者はすでに論じておいたが[3]、この作品以前にも異国を趣向にした作品として『庭荘子珍物茶話』（寛政9年〈1797〉）、『風見艸婦女節用』（寛政11年〈1799〉）などが指摘されている[4]。これらの作品には、具体的な異国像や異国観はみられないが、異国に対して関心を持っていた馬琴が、なんらかの異国的な要素を盛り込んでいたことは間違いない。

馬琴が『椿説弓張月』を執筆していた時期と『白石叢書』[5]を収集していた時期は一部重なっている。また、『白石叢書』には、詳細な校訂や書入れがなされており、異国情報収集に熱心な馬琴の姿がみえてくる。本稿では、馬琴が執筆した作品にみえる異国像ではなく、異国に関連する情報を求めた痕跡を通して彼の関心のありかを追求したい。つまり、馬琴がどこからどのような意図で異国の情報を入手したか、そしてそれを情報源として、さらにどのような書物や風聞などを収集したかに焦点をおきたい。その情報源の一つである『白石叢書』と、そこに書かれた書入れや校訂を最初に分析し、さらに『馬琴日記』に記述された様々な異国に関連する記録を中心にして考察してみたい。

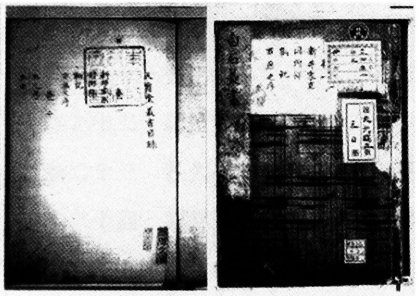
2.〈異国〉の情報源―『白石叢書』の収集

馬琴は『白石叢書』を1冊ごとの書物ではなく、叢書として買い求めている。叢書の目録はさまざまであり、内容は多岐にわたっている。知識欲旺盛な馬琴は、白石の著書によって、知識欲を満たすことができたであろう。『白石叢書』の内容はヴァラエティに富んだものであるが、中でも、本稿では、異国について書かれた巻について注目したい。『白石叢書』に記された異国に関する記述には、朱筆で修正されたり、補足情報が書き込まれたりしている箇所が散見される。叢書の収集と『馬琴日記』の執筆時期は離れているが、この書入れを介することによって『馬琴日記』の読みに新たな見解を与えているのではないか。

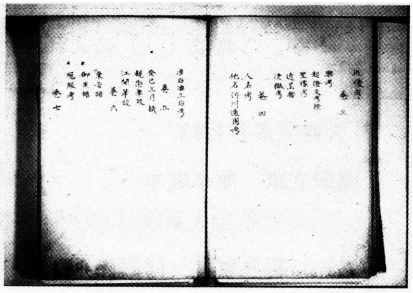
馬琴が所蔵していた『白石叢書』については、三宅米吉[6]がその存在と所蔵場所を指摘して以来、宮崎道生[7]は新井白石との関係を中心に、播本眞一[8]は

馬琴の異国認識の資料として捉えている。また、『白石叢書』の収集が完了した時期が文化5年(1808)であり、『椿説弓張月』(文化4年〈1807〉～同8年〈1811〉)の執筆時期と重なっていることから、『白石叢書』の異国情報と作品の結びつきについて、大高洋司が「残編には、「拾遺篇附言」の考証に基づいて、……物語の結末で、為朝自身もまた神となったことの根拠が示されている。参考文献については、『中山伝信録』に加えて、『南嶋志』等、新井白石の著作が前面に出てきているのが特徴である」[9] と指摘している。『椿説弓張月』は、前編・後編・続編・拾遺・残編で構成されており、続編の刊記の「附録」や残編の序に、『南島志』(『白石叢書』の巻十七)、『琉球国事略』(巻二十七) などの記述がみられ、後半の構想に影響を与えていることが確認できる。

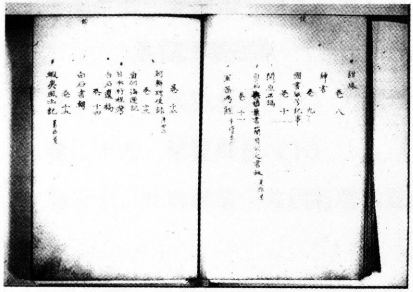
馬琴が所蔵していた『白石叢書』は、巻一の表紙に「巻一　新井家系　同附録　鞆記　古画之序」と所収書名があり、「曲亭蔵本」という朱印が押され、『白石叢書一』と題がつけられている。巻一の冒頭には、「天爵堂叢書目録」という



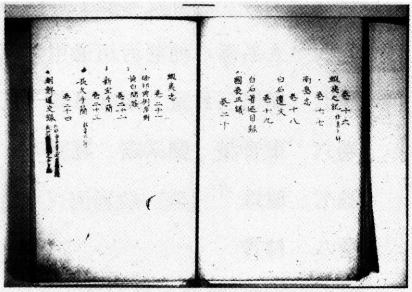
【図版1】『白石叢書』巻一の表紙と目録
(筑波大学図書館所蔵本)



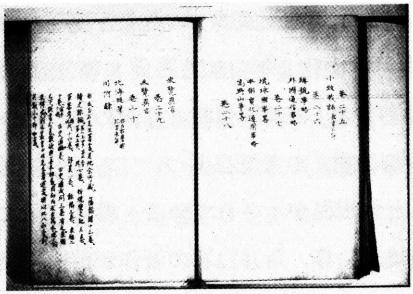
【図版2】『白石叢書』の目録

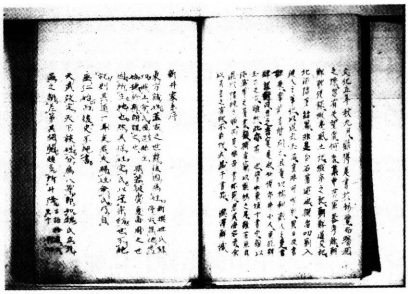


【図版3】『白石叢書』目録



【図版4】『白石叢書』の目録





【図版5】『白石叢書』の目録と馬琴の書入れ　【図版6】馬琴の書入れと「新井家系序」

題目があり、その下に、「瀧澤文庫」、「曲亭蔵本」という印が押されている。それから順番通りに巻一から巻三十までの30冊、54の書物名があげられている。

次にあげるのは、『白石叢書』の目録であり、その巻ごとの書物名である。『白石叢書』の巻一には、全巻の目録が記されているが、実際の巻の題目とは異なる場合がある。題目の中の一字のみの場合もあるが、すべて違う場合もあり、ここでは（　）に入れて題目を併記した。また、馬琴は、題目に自筆で補注を加えているが、これは〔　〕に入れた。

「天爵堂叢書目録」

滝沢文庫　曲亭蔵本

巻一　新井家系　同附録　鞆記　古画之序

巻二　木爪（瓜）考　玉考　俳優考

巻三　楽考　起証文考証　聖像考　近（准）呈按　決獄考

巻四　人名考　他名河川通用考（地名河通考）　准后准三后考

巻五　癸巳三月議　観楽筆談　江関筆談

巻六　東音譜　御系譜　冠服考

巻七　紺珠

巻八　神書

巻九　国書詠（復）号記事

巻十　関原正譌(関ヶ原正譌　此下二通脱簡)　白石與鳩巣書簡自公之書抜〔是編逸〕

巻十一　軍器考余〔宇治田忠郷〕

巻十二　朝鮮聘使録〔唐世済〕

巻十三　奥羽海運記　日本行程考（記）　白石遺稿

巻十四　白石書韓（翰）

巻十五　蝦夷風土記〔葛西質〕

巻十六　蝦夷之記（蝦夷記）〔作者未詳〕

巻十七　南島志

巻十八　白石遺文

巻十九　白石著述目録　国喪正議

巻二十　蝦夷志

巻二十一　経邦典例序例　黄白問答(田制考序　貨幣考序　車輿考序　冠服考序　楽無考序　職官考序　方策合編序　以上経邦典例序例黄白問答)

巻二十二　新室手簡

巻二十三　長久手簡（記）〔記者不詳〕

巻二十四　朝鮮通交録〔此非白石著述享保中成於對馬人之手者也〕

巻二十五　小牧戦話〔記者不詳〕

巻二十六　殊号事略　外国通信事略（右骨董録　五事略一）

巻二十七　琉球国事略　本朝宝化(貨)通用事略　高野山事略(右骨董録五事略二)

巻二十八　采覧異言（上）

巻二十九　采覧異言（下）

巻三十　北海随筆〔非白石著述記者未詳〕同附録（終）[10)]

『白石叢書』の題目のいくつかには、「作者未詳」、「記者不詳」、「非白石著述」

と馬琴によって書入れがなされている。叢書のほとんどは、新井白石の著作には違いないであろうが、中には、白石の著作ではない、と馬琴が判断したものもある。訂正の朱筆（書入れ）が多い巻が、そう判断されているようである。馬琴にとって、『白石叢書』の情報や知識の信頼性は、白石の著作であるか否か、という点にかかっていたと思われる。

叢書の大きな特徴としてあげられるのは、異国に関する書名が多く見られることである。特に朝鮮に関しては『朝鮮聘使録』、『朝鮮通交録』、琉球は『南島志』、『琉球国事略』、蝦夷は『蝦夷風土記』、『蝦夷之記』、『蝦夷志』、『北海随筆』、西洋は『外国通信事略』、『采覧異言上』、『采覧異言下』などの、異国についての書物が目立つ。このような異国を題材にした多数の書物から、馬琴は島国日本の彼方に存在する異国情報を正確に収集しようとしていたことがうかがえる。

また、馬琴は巻一の書物目録の次に、叢書に関する情報を記している。それは『白石叢書』に関する説明や、以前から所蔵していた白石著作、それに未だ収集していない書物名、購入時期、白石本人が著述したものかどうかなどについて、詳しく書入れをしている。次の引用は目録の後に書き込まれた、馬琴の自筆である。

○解云、白石先生著書、是他余所蔵、藩翰譜十三巻、読史余論〔第一上中下第二上下第三上下、共ニ〕七巻、折焼柴之記三巻、軍器考〔図説〕共ニ十四巻、詩集一巻、余稿三巻、東雅二十巻、〔合本十冊〕古史通四巻、古史通或問三巻有之、東雅已下、誤書尤甚、敢欲與善本相易、因却而求古写本、既久而未得也、○削去叢書中非先生著述者、換以此八部書、則其数三十部如旧、（〔　〕は割注）

○文化五年秋九月、購得是書於坊賈、而繙閲之際、忽有失望者、何者、集中若軍器考余、朝鮮聘使録、蝦夷風土記、蝦夷之記、朝鮮通交記、北海随筆諸篇、非是白石著述也、撰者叨剰入後人之筆記、以混乱玉石、豈非可恨耶、異

日及書肆来、擧前言質問之、且責以揣利欺人之叟、書肆謹日、君之言寔是也、如僕市井小人、奚能辨玉石之有、雖然、此亦有以也、譬如東垣十書中、雜以海蔵等之著書、顧、撰者窃以類鳩之耳、雖有魚目混於隋珠之嫌、而莫非竒書珎籍、君其海容焉、余以其言之有理、不敢択、咸蔵于書箱　滝沢解識[11)]

この馬琴の書入れにおいて興味深い点は、前述したように、『白石叢書』の中でも、特に白石自身が執筆した書物かどうかに注意をはらっていることである。白石の著作ではないと判断した場合、馬琴は「非是白石著述也」と書いている。これは白石の学者としての学識を信頼していた馬琴が、白石の著述であるかどうかに、かなり敏感であったことの証拠であろう。馬琴の判断によると、『軍器考余』、『朝鮮聘使録』、『蝦夷風土記』、『蝦夷之記』、『長久手簡』、『朝鮮通交録』、『小牧戦話』、『北海随筆』の8冊が白石の著述ではないとされている。また、『長久手簡』と『小牧戦話』についても、目録の部分に「記者不詳」という書入れがあることから、白石の著述ではないと判断されていたことがわかる。

馬琴自身が記したところによると、それ以前から『藩翰譜』、『読史余論』などの白石著作を所蔵していたようだが、一揃いの『白石叢書』を手に入れたのは、文化5年（1808）9月である。このように馬琴は島国日本をとりまく周辺諸国から、西洋諸国にまで大きな興味を持ち、それらの異国情報を獲得するために、『白石叢書』の収集に力を注いだことがわかる。また、その収集にとどまらず、自分なりの知識に照らし合わせながら、彼は各巻の内容をこまめに校訂している。次節は『白石叢書』の各巻ごとにおける馬琴の書入れや、巻末に書かれた校訂記録などを分析し、特に異国を題材にしている書物を中心にして述べていきたい。

3.『白石叢書』における馬琴の書入れ・校訂―〈異国〉に関する書物を中心に

馬琴は、先に述べたように、『白石叢書』の誤字や間違った情報などに朱筆を入れ、丁寧に校訂している。また、異国名などに関しては振り仮名をつけてお

り、各巻の末には校訂をした時期などの校訂記録を詳しく記している。次は『白石叢書』の異国に関する書物に記された馬琴の書入れや校訂の記録である（巻末の馬琴の書入れは、宮崎道生の論文[12]を参考にし、筆者が補充を行った）。

(1) 巻十二　朝鮮聘使録

○「長保楽」末注―解云、是一條、一本無、蓋非君美誤筆、伝写蛇足也

○巻末―解云、是書與国書復号紀事〔在叢書第九〕参攷、則精疎自暁然也、唯恨未得看善本焉、雖即施点莫奈誤脱耳（〔　〕は割注）

(2) 巻十五　蝦夷風土記

○「革頼多（カラント）」の頭注―按旧図、革頼多（カラント）即カラトノ嶋、由尺（カシヤ）乃チウツシヤ崎是也、革頼多由尺同地異名耳、革頼多、今俗曰革来武騰（カラブト）

○「祭祀」の頭注―梨泥疑泥梨轉倒蓋泥梨猶地獄云也

○巻末―蝦夷風土記一巻、蓋非白石之著述、或云、寛政葛質所作、撰者謬剿入白石叢書中、甚不可也、披閲者応亮察耳　読書間人訓点

(3) 巻十六　蝦夷之記

○「蝦夷之記巻三」の頭注―著無車固一揆之事

志尾写利蝦夷風土記作渋舎利（シフシヤリ）著無婆因同書作車骨車院　未知孰是

○巻末―壬午五月九日校訂　読書閑人

是書非白石著述、撰者剿入諸白石叢書中者可也、雖事迹係実録、文言俗悪不可読、加之、伝写訛舛亦甚矣、因施雌黄僅似成語者、原本正徳元年所録、記者未詳云　玄黙敦牂暑月端玖　読書間人識

(4) 巻十七　南島志

○「大島」の頭注―大船二百隻云云。解云。比他処船数、可疑也。二百此二十之誤写耳。沱云他本亦作二百如是

○巻末―余嘗以謂。是書與清徐葆光中山伝信録比校。則非但有異同耳。其文簡而易通暁。其言而無臆説。其勝也亦遠矣。是本年来蔵弆而未遑校正。頃徴両淫霖。茅舎無客。因凭紙窓下。校訂点裁以為畀児孫両三日。而方卒業。余素景仰先生学術。其遺書所蔵。豈一朝叟。児孫倘有嗜読書者。校点亦與是書倶遺焉。文政五年壬午夏五月十二日　滝沢解識

(5) 巻二十　蝦夷志

○頭注―盎中、鮮按、 盎盆也、又盛貌。此據荘子所謂鼓盆者歟、

○巻末―壬午皐月校訂且施訓点　滝沢解

蝦夷志一巻、勿斎先生所著、其文也簡、其言也約、而無遺漏焉、近為蝦夷志者、剽窃模疑、且添蛇足而已、後人之精細、鳥知不如先生之簡約耶、蓋先生博聞強記、著述以百数、可謂蓋世之通儒・作家之擘也、余以衰病故懶惰益甚、頃雨窓岑寂、筆硯生塵、因校訂是等之書以消日云　時文政壬午皐月十日　滝沢解識

(6) 巻二十四　朝鮮通交録

○巻序―朝鮮通交録一巻、非新井先生著述、而剿入白石叢書中者悞矣

滝沢解識

是書、記者ノ名氏ヲ審ニセサレトモ、観ルニ対馬人ノ手ニ成レルモノナリ、コレ極メテ古実ヲ考ル者ニ裨益アリ、只恨ム、何人カ白石ノ名ヲ屓シテ叢中ニサシ入レタル、最モ嗚呼ナルワサニソ有ケル　壬午夏五月下浣再識

○「朝鮮通交ノ次弟」の頭注―海東記諸国輿地勝覧

○巻末―聘使名目毎年朝鮮ヨリ清国へ遣ス使者ノ名目ナリ

「謝恩使」の注―冊封ノ謝礼ノ使者ナリ

「皇暦使」の注―暦ヲ受ル使ナリ

「賚咨官」の注―御沙汰聞ナリ

「告訃使」の注―凶事ヲ告ル使セ

壬午夏五月二十二日校訂

(7) 巻二十六　外国通信事略

○巻末―文政五年壬午夏五月二十五日校訂畢、但清国州県、文字伝写訛舛未詳者、異日拠大明一統志及広輿志、当比校以就正焉　滝沢解識

(8) 巻二十七　琉球国事略　本朝宝化通用事略

○「琉球国事略」巻末―壬午五月二十五日校訂　鬻斎解

○「本朝宝化通用事略」の頭注―新伊西把弥亞（ノヒスハン）　漢人剌亜（イキリス）　意大里亜（井タリヤ）

○「本朝宝化通用事略」巻末―壬午夏五月二十六日校訂　鬻斎解

(9) 巻二八　采覧異言上

○「采覧異言叙」の頭注

―解按スルニ、邏馬ハ、外国通信事略ニ、カラマト訓セリ、コノ邏馬人ノ名ヲ、ヨハントイヒケリ、後ニ刑セラレタルヨシ、同書ニ見エタリ、コヽニ、ヨアントアルハ、乃チヨハンノコトナルヘシ、外国通信事略ニ、邏馬ヲカラマト假名ツケシ、カラマハロウマノ誤写ナルヘシ、軍器考ニハ、ロウマト読セタリ、

○巻末―此余秘蔵之写本也、今茲午壬夏日草堂無叉、因披閲之際、施点裁訓詁以畀児孫也耳、時皐月二十九日卒業於第一巻第二巻、明旦陸月朔職　滝沢解瑣吉甫

(10) 巻二十九　采覧異言（下）

○「齊狼島」の頭注

—扶南伝、見新唐書列伝第一百四十七下、〔巻二百二十二下〕、盤盤伝、見右仝巻、曰、其臣曰教郎索鑑、曰崑崙帝也、曰崑崙勃和、曰崑崙教帝諦索甘、亦曰古龍、古龍者、崑崙声近耳、〔盤盤伝摘要〕　解略注（〔　〕は割注）

○「榜葛剌」の頭注—解云、鳩有一種、俗云榜葛剌鳩、近舶来之物、今罕干此、

○「暹羅（しゃむ）」の頭注

—解云山田二左衛門本末、今可考者、唯有暹羅紀事一巻耳、此是智原五郎八者、当時於彼国、所録也、所謂白石先生別考者、吾未得観也、

○「満剌加」の頭注—亀龍解按鱷魚翻訳名義集謂殺子魚者是歟

○「呂宋」の頭注—解云ルスンハ東呼而已於本邦即曰マニラ国云

○巻末—白石先生所著采覧異言五巻、及校訂点裁、為使読干児輩、老眼頗苦細書、四五日而方卒業、時文政壬午夏六月初三日、江府城北市隠　斎滝沢解識

(11) 巻三十　北海随筆　同附録

○巻末—北海随筆非白石先生著述、不可入之于白石叢書中、是徒羨先生之才者之所為歟、或後人誤認以為先生著述耳、戊辰冬識

○「同附録」（終）

—文政五年壬午六月三日一校畢

解按北海随筆上下二巻為全本録於此者下巻而耳也是全書亦在吾文庫中矣可併見

馬琴による『白石叢書』の校訂や書入れは、馬琴が叢書の内容を丁寧に読み

込んでいたということであり、それはまた、白石の知識や情報を積極的に取り入れようとしていた証でもある。叢書の中で、異国に関する書物は3割を超えている。馬琴の異国知識は『白石叢書』から得たものが多いことは間違いないだろう。

馬琴は、各巻の内容を精読し、国名や文字の間違い、国名の読み方、内容の再確認などを行っている。また、蝦夷の反乱、朝鮮の官吏など、異国の政治問題や国家制度に関心を持ち、それに関する校訂を施している。馬琴の知的好奇心は、領土的な関心というよりも、言語・道具・制度へと向けられている。そのような関心が琉球、蝦夷を含め、隣接国の朝鮮、さらに西洋にまで及んでいた。だが、それだけではないようだ。日記を見ると、馬琴は日常的に異国に関する情報に触れていた時期がある。次の節では、馬琴が日記に書きとめた異国についての記述をみていきたい。そして、馬琴が、どのような経路や人物から異国書物、異国風聞などを得ていたのかについて考察する。

4. 日常がはくくむ〈異国〉――『馬琴日記』に記述された〈異国〉

『馬琴日記』に関する研究には、日記そのものを対象にしたもの[13]や、日記を通して馬琴一家の生活諸相を分析したものもある[14]。また、日記に書かれた馬琴作品の執筆過程[15]、水滸伝との関係[16]、松前藩との交流[17]などに関する先行論がある。特に、武藤元昭は「作品に関して書かれているのは、執筆の進行状況、校正の進捗状況、書肆との交渉といった、現象面だけである。作品について、馬琴自身の心情は全く書かれていない。日記から作品への投影を読みとることもできない」[18]と指摘し、日記と作品との直接的な関連性はないと述べている。確かに、『馬琴日記』には、作品の構想、感想などは記されていない。しかし、日常的に馬琴が借用し筆写した本や、知人や友人、または家族から得た世間の噂などは書きとめられている。それは、直接的な作品への言及ではないにしても、馬琴が日記に書き記そうと、選び取った情報である。そうした情報は、少なくとも、馬琴の作家としての好奇心の傾向を示すものであるとはい

えよう。

日記から作品への投影はなくとも、作品の執筆中、馬琴がどのような情報に興味を持っていたか、ということは、十分に日記から読み取れる。次は、このような観点から、『馬琴日記』の中で異国に関する記述を取りあげ、『白石叢書』以後の、馬琴の異国情報源を考察してみたい[19]（傍線部は筆者による）。

◆文政９年（1826）

〇正月廿九日

一昨夕六時比、松前勘定方大野幸次郎より使札。右は近比駿州へ漂流の唐船事、委細に御聞被成に付、未及聞候はゞ、詳しくたづね可申旨、申来る。

〇三月九日

一昼前、松前内大野藤（ママ）次郎より使札。右は、此節紅毛人参着に付、長崎へへ罷越、めづらしき儀も、及承候はゞ、御隠居御聞被成度よし。

〇十二月十九日

一谷文二より、昨日たのみこされ候一封、今日、以多七、返之。蝦夷へ文通は禁止に付、外へたのみ可然旨、予代筆にて、手紙そへ遣し、うけ取書とりおく。

日記の冒頭部には、松前からの使札があったことが記されている。松前藩の松前道広は馬琴作品の愛読者として知られ、その縁で、文政３年（1820）に馬琴の息子である宗伯は松前章広の医師として職を得ることになった。その後、馬琴は松前藩との付き合いのなかで、異国書物を借り受けたり、異国情報などを得ることになる。日記には、松前との交流の記述が多くみられ、蝦夷（北海道）などに関する多くの情報を得ていただろうと推測される。

◆文政10年（1827）

○閏六月廿六日

一浅野正新忰浅野左近、土御門家御使として来ル。所要ハ、当春三月中貸進之独考論二冊・独考二冊・伊波伝毛之記一冊、此節、名越使者参府ニ付、返上被致候趣。

○七月廿三日

一今朝、清右衛門様入来。……○昼前、松前老侯使北村仙太郎来ル。所要ハ、例之無薬体(ママ)。清朝北京動乱風聞、天文台阿蘭陀通詞より、御隠居へ申上候由。実説承り候ハヾ知らせ候へ、との口上也。

○九月朔日

一……○同刻、牧村右門使来ル。清朝動乱所々戦之子細書、聞出候ハヾ、九日罷出、咄候様申越。返書遣ス。

○十二月十一日

一……○夕七時前、松前河合藤十郎奉札。長崎奉公御下りニ付、清朝動乱様子相知候ハヾ、御聞被成度趣也。

この引用は、清の動乱についてである。馬琴は、隣国の政治問題にも関心を持ち、松前経由で情報を得ていた。この動乱について植田啓子は「この動乱は『巷街贅説』所載の「回回国と韃靼と、二手にて清国へ責入、韃靼は北京へ責入候間、既に官軍鑾にも可相成処、漸々相凌居候」という事件をさすものだろう」[20]と述べている。

◆文政11年（1828）

○九月五日

一早朝より、鶴屋水滸伝六編四十丁之内二十丁、泉市金ぴら船廿丁之内十丁校合いたし候処、……台湾鄭氏紀事披閲。

○十月十二日

一松前老侯御使太田九吉来ル。予并ニ宗伯、対面。北馬画松前ウズ牧士と蝦夷と騎炮ニて熊ヲ打図、大ふくかけ物これを見せ給ふ。

○十月廿七日

一昼後、松前老公御使、太田九吉来ル。予、対面。奇説聞の為のよし、させる奇説なし。台湾鄭氏紀事宜キものニ候間、被成御覧候様、由之。九吉書とめ、帰去。

◆文政12年（1829）

○正月十三日

一法連より今日宗伯へ被貸候写本二部の内、文化二年漂流人四人ヲロシヤより帰朝の口書写し、六十頁餘閲之。

○正月十五日

一法連被貸候露西亜へ漂流人之口状、今日写しかゝり候処、多用ニ付、僅ニ五丁写し、……。

○正月十六日

一……○昼後より、露西亜聞見録上冊、廿三丁写之。

○正月十九日

一……貸(ママ)入全部三十四部之外ニ、鄭氏記事・文教温故壱部づゝ、右代銀五十一匁五分なるべし。

○正月廿一日

一……遺老物語・天竺徳兵衛物がたり・みのわ軍記・最上記・二疋猫物語・読史餘録(ママ)・安西軍記等、岡田やより差越候よしニて、持参。

ここには『露西亜見聞録』、『鄭氏紀事』、『天竺徳兵衛物がたり』についての記述がみられる。文政12年（1829）1月のこの一週間だけでも、異国に関する書物が5冊にものぼっており、馬琴の異国に対する関心の大きさを示している。そのなかでも、ロシアの漂流人などについての風聞を記録したものを直接借り、

筆写している。

◆天保２年（1831）

○四月七日

一関忠蔵より使札。一昨日之返翰也。前夕やくそくの漂流人口書并ニ其外一件書，被恵借之。近来奥州の船頭清吉・亀松等十二人内、五人病死、七人清国よりおくり来せし也。

○四月十五日

一……関忠蔵へ過日恵借之漂流人案牘数通・別紙一袋、宗伯ニもたせ、返し遣ス。

○四月十六日

一予他出中、家主久右衛門来ル。……商人画詞・文政元年五月十三日相州うら賀へイギリス大ふね着の略記、登返翰、右一封はおミちへわたし置候よし。

○六月廿四日

一昨（ママ）廿三日朝、清右衛門来ル。……半蔵御門外三宅内、渡辺登へ返却のイギリス船図説、手紙差添、一封にいたし、右登方へ持参。

馬琴が中心となり、友人の山崎美成、屋代弘賢などが参加した兎園会は、文政８年（1825）に組織された。兎園会の趣旨は、世の中の珍説・珍奇を話し、または珍物などを見せながら、見聞をひろめるというものであった。兎園会の話を収録した『兎園小説』は、文政８年（1825）に刊行された。珍説、珍奇な話を集めた本には、当時世間を騒がした異国船の出現や、それに関する話が含まれている。兎園会が解散した後、馬琴の編集によって刊行された『兎園小説拾遺』の一巻の最後と二巻の最初には、日記にも記述されている浦賀のイギリス船の話が載せられている。

○浦賀屋六右衛門手記　霊巌島住居

去る十三日文政元年五月十三日也、亥刻、相州浦賀へ異国船一艘着す。……

一、此船、イギリス国の令にて、榜葛羅国より出帆いたし候由。……

此後、文政五年七月又来る。次の巻に載たる船の図には、檣三本ありて大同小異なり。おもふに次の巻の図は、五年の七月に来つる船の図なるべし。これ彼合せ考べし。

○イギリス船図説

文政元戊寅年五月十三日、相州浦賀湊近辺へ漂着の異国船。……

イギリスの浦賀着船せしは、文政元年五月と、同年七月と両度也。[21)]

日記にも記録されているように、通商を要求して浦賀に漂着したイギリス船の模様や同乗した異国人について詳しく記されている。また、火薬桶、鉄砲、刀などの武器、水留、カンナ、ノコギリの道具、異国人の様子などの図も同時に載せられている。『馬琴日記』と『兎園小説拾遺』の記述からは、馬琴がイギリスなどの異国船や異国人にまで興味を持っていたことがうかがえる。

◆天保３年（1832）

○六月十一日

一今朝、高松家老木村亘より使札……同人より、細川幽斎年譜二冊・生嶋舟子漂流二冊、被借之。

○六月十三日

一……同家中河合孫太郎方へも、江戸志六の記(ママ)・漂流記一冊共ニ弐冊、料紙差添、遣之。

○六月廿二日

一昼後、河合孫太郎来ル。予、対面。江戸志六の巻・生嶋水夫漂流記共写し出来、原本共持参。

○六月廿六日

一昼後、木村亘より使札。……猶又、先便約束之瑣(ママ)国論一冊・尾崎雅嘉叢書一之巻、被貸之。……過日借覧之豊嶋重吉漂流記二冊、返却。

○七月九日

一四時前、画工柳川重信来ル。……八犬伝八輯の上とびらの画、紅毛狗画キ候様、示談。外わくもやう注文いたし、紅毛画箋一枚かし遣ス。

○七月十二日

一八半時過、河合孫太郎来ル。……瑣(ママ)国論一冊写し候様、申談じ、料紙差添、わたし使ス。

○七月廿一日

一今朝、えぞ無名鳥隕ル。去ル酉年冬、献残松前老公より給ハりしもの也。四羽の内、三羽ハそのとしの十二月隕ル。此一羽恙なくて、八ケ年予が家にあり、本国にハたえて無之鳥也。

○八月二日

一戸田内河合勇七朗来ル。予、対面。……清朝飢饉兵乱のかけ(ママ)付一札見せらる。年月しるし無之、これハ天明七年、本方飢饉之節、清国ニても同様之事、その比の書つけなるべき由申聞、かりおく。

○八月十八日

一……此序を以、河合孫太郎へも鎖国論写しのさいそく、申遣ス。

○八月廿日

一夕方河合孫太郎来ル。鎖国論写し出来、持参。……過日、孫太郎親勇七見せられ候、清朝兵乱の記、今日返却。

○九月八日

一昼後、木村亘事、黙老より使札。鎖国論校訂、謝礼申来ル。

上記の記述からみえる『鎖国論』とは、エンゲルベルト・ケンペルの著作『日本誌』の一部分を志筑忠雄が翻訳したもので、欧米人の日本観を変化させた書物として知られている。この『鎖国論』には、儒学者、国学者らが関心を寄せていたが、馬琴もまた同様であった。馬琴は『鎖国論』を筆写、校訂している。

播本眞一は、馬琴が所蔵していた『鎖国論』が、小泉本と架蔵本の二種類であることを考証しており[22]、植田啓子は、馬琴の対外関心への志向を、貸借した本から探り、その中で、翻訳本としては一種のみであった『鎖国論』を論じている[23]。馬琴は、外国から日本がどのようにみえるのかに興味を持ち、『鎖国論』を読んでいたようである。

○十一月四日

一昼時、関忠蔵内義より使札。八犬伝八輯下帙借覧いたし度よし、申来ル。新板中山伝信略折本一冊、未見候ハヾ見候様申され、かさる。

一近日、琉球人江戸着のよし。此度ハ中山王来朝の処、摂州にて死去のよし、風聞也。

○十一月七日

一今朝、地主杉浦氏老母入来ル。……中山伝信略折本、かし遣ス。琉球年代記一冊、被貸之。

○十一月十五日

一昼後、清右衛門、為当日祝儀、来ル。……○杉浦より、伝信略折本三通・琉球年代記、返却畢。

一今日、琉球人江戸到着也。正使ハ道中ニて死去、則、代りを立らると云。琉球年代記・中山伝信略等の新刻蔵板もの、両三種出ル。

○十一月十九日

一予、木村黙老より見せられ候、異国往来一冊、并ニ松坂殿村氏より借用之桜木物語下冊校閲。

○閏十一月六日

一屋代太郎殿より使札、……御同人蔵板琉球状一巻おくらる。

一右同刻、お百、太郎・お次同道、お成道めでたや久兵衛方へ罷越、近日、琉球人通行の筋、於右店、見物之事たのミおく。ほどなく帰路。

○閏十一月八日

一明九日、琉球人上野参詣上覧有之。上覧処前通行、其外御三卿方御見物ニ付、昼比、戸田やしき前通行のよし。……此度ハ前々とふり合ちがひ、琉球人通行節、桟敷をかけ、前日見分有之。

○閏十一月九日

一四半時比、おさき来ル。琉球人見物の為也。

一夕七時過、お久和よりおミちへ使札。今日琉球人見物之事、昨日頼遣候処、不行ニ付(ムシ)、様子聞(ムシ)の為(ムシ)よし。

上記の記述は、琉球人の江戸上りに関する箇所である。琉球使節使の上京の際、馬琴は後で話を聞くためであろう、家族に見物をさせている。また、琉球人の江戸上りで関心が広がったようで、同時期、『中山伝信略』、『琉球年代記』、『異国往来』などの琉球に関する書物を手に入れている。この、琉球使節の江戸上りについては、横山学も『馬琴日記』を、江戸期における当時の人々の琉球観を知るうえで重要な資料の一つとして注目している[24)]。

◆天保4年（1833）

○四月廿四日

一木村亘より使札。……朝鮮人書画扇面一枚并ニ朝鮮道路図少許同薬果(ヤツワク)といふくわし小七片、被贈之。

○五月廿六日

一八時過、木村亘より使札。……対馬の人の話・朝鮮の略記、又当年讃州にてほり出し候古器の図、被為見之。

○七月廿三日

一予、薄暮迄ニ、讃州漂流人持帰り候物、船の図迄、不残写し畢。

○七月廿九日

一予、職方外紀・瓊浦偶筆等ハ、采覧異言を以、蛮国の名・蛮名等、かき入、終日也。

○八月十七日

一昼前、木村亘より使札。白石叢書三・四弐冊、被返之。尚又、所望ニ付、同書五・六の巻弐冊、外ニ暹羅記事一冊、共ニ三冊かし遣ス。

○八月廿日

一昼前、木村亘より使札の暹羅記事、被返之。外ニ、蘭人□気考図説釈文一冊、被返之。

◆天保5年（1834）

○正月十八日

一昼八時過比、松前内大野幸太郎より宗伯へ使札。……尚又、所望ニ付、北海談彙五冊かし遣ス。

◆天保13年（1842）

○正月廿三日

一三毛（ママ）備後守殿蟄居用人渡辺登事、華（ママ）山、旧冬十二月中旬、於三州田原、自殺の由、慥なる風聞有之候由、山川白酒噂にて、初めて是を聞。忠臣の志也と云。尤憐むべし。

○正月二十九日

一……為永春水は、四五日以前、手鎖掛られ、家主預けになり、金水等は未だ御沙汰無之。

◆弘化3年（1846）

○六月九日

一此節、浦賀奉行大久保殿より、北亜米利加舟着来候に付、候届出の写、長屋下座見より借受候由に付、持参、被為見。大船長さ四十二軒（ママ）、人数八百人、小舟は人数二百人、大筒八十挺・短筒八百挺、其餘有之由等、右書面に見えたり。売買顧有之由に候得ども、通辞、アメリカに疎く候

に付、早速和解致がたき由也。

これまで考察してきた『馬琴日記』の異国に関する記述は、次のように整理される。馬琴は、あまり外出もせず、限られた人間関係の中で暮らしていたが、その限られた交友関係のなかで、異国知識、異国情報を最大限に収集している。情報源としては、松前藩、そして兎園会のメンバーがあげられるだろう。また、馬琴は異国に関する情報を入手した後、それに関する書籍の貸し出しをし、筆写もたびたびしている。さらに、日記のなかで、一度読了したはずの『白石叢書』について触れている箇所がある。それによると、馬琴は再び読み直し、校訂を行っている。

このような馬琴の異国への関心や好奇心は、天保5年（1834）から急激に衰えている。天保五年は、息子の宗伯の病気が再発した年で、その翌年に宗伯は死んだ。宗伯の死によって馬琴と松前藩との交流は絶たれ、異国に関する大きな情報源がなくなったためである。また、馬琴の目を異国へと向かわせた、もう一つの大きな情報源であった渡辺崋山は、蛮社の獄の後、天保13年（1842）に自殺している。これ以降、馬琴の異国に関する記述はほとんどなくなっている。

5. おわりに

本稿では、江戸後期を代表する作家である馬琴が、作品の創作にとどまらず、日々積極的に異国知識や異国情報を獲得しようとした姿勢が確認できた。文化5年（1808）『白石叢書』を購入したことは、馬琴の異国に対する関心が高まるきっかけの一つであったことは間違いないだろう。それは、これ以後、馬琴が兎園会を結成し、珍説珍奇の類の話を求め、特に異国に関する話を追求したことからももうかがえる。このような異国への興味や関心が反映された作品はほとんどない。しかし、『馬琴日記』は、馬琴が作家、あるいは人間として一生追求していった思想や精神を知るうえで重要な手がかりを提供してくれるはずだ。

馬琴は、鎖国に同調したことから、鎖国主義、保守主義の立場を取っていると言われているが、それは彼が個人としては異国に関心を寄せ、開明的な思想の持主達との交友もありながら、作品に異国像が盛り込まれず、渡辺崋山などのような開港を主張した人物としだいに距離をとっていったことなどが原因であろう。しかし、実際は、異国情報の窓口、交友関係が断たれるまでの『馬琴日記』から見える馬琴の日常生活は、異国像に関心を持ち、異国知識や情報を得ようとした好奇心旺盛な姿である。本稿では、馬琴が収集した『白石叢書』、そして異国に関連した書物や、『馬琴日記』の異国についての記録を通し、彼が日常的にはぐくんだ〈もう一つの世界〉、つまり異国や異世界を追求することを可能にした異国情報源を考察した。

注

1）『馬琴日記』の表紙には、「雅俗日記」、「戊子日記」などと年ごとに題目がつけられている。もともと、20年分近い日記が確認されているが、焼失や行方不明のために、そのほとんどが失われた。現存本は、文政10年（1827）～同12年（1829）、天保3年（1832）～同5年（1834）、嘉永元年（1848）の7年分であるが、和田萬吉が翻刻した天保2年（1831）の1年分（和田萬吉『馬琴日記』丙午出版社、1924年）を含めると、8年分になる。文化10年（1827）の日記の表紙は、「雅俗日記四」となっていることで、文化七年（1824）からはすでに、日記が書き始められていたことがうかがえる。また、板坂則子も「今日、この日記は文政九年のものが現存最古であるが、馬琴が日記を書きはじめたのは、この年よりあまり遡らないのではないかと考えられている。この文政九年、馬琴の息宗伯は松前侯出入医者となり、馬琴の年来の滝沢家再興の望みに達成の見込みを大きく与えられている」と論じている（板坂則子「馬琴日記」『研究資料日本古典文学⑨日記・紀行文学』明治書院、1984年、247頁）。

2）『日本古典文学大辞典』第5巻、岩波書店、1984年、48頁。

3）拙論「『椿説弓春月』における〈異国〉―為朝の〈島〉への移動と琉球―」（『テクストたちの旅程』筑波大学文化批評研究会、2008年）。

4）播本眞一「馬琴と異国」（『江戸文学』第32号、ぺりかん社、149～150頁）。

5）『白石叢書』は30巻30冊・続22巻20冊で、新井白石の著書を集成したものである。江戸後期に成立されたと思われるが、成立事情の異なる同名の叢書があり、内閣文庫蔵本（巻一・七欠。存50冊。昌平坂学問所旧蔵）、静嘉堂文庫蔵本（続欠。存30冊）、筑波大学蔵本（続欠。存30冊。曲亭馬琴旧蔵）の系統が代表である（『日本古典文学大辞典』第5巻、岩波書店、1984年、54頁）。

6）三宅米吉「馬琴と白石」（文学博士三宅米吉著述集刊行会編『文学博士三宅米吉著述集』上巻、目黒書店、1929年、652頁）。

7）宮崎道生「滝沢馬琴の蒐集校訂本『白石叢書』」（『国学院大学大学院紀要』第16輯、国学院大学大学院、1984年、67～70頁）。同「新井白石と滝沢馬琴」（『新井白石と思想家文人』吉川弘文館、1985年、267～295頁）。

8）注4と同じ。
9）大高洋司「『椿説弓張月—構想と考証—』」（『日本文学研究論文集成22　馬琴』若草書房、2000年、141～142頁）。
10）筑波大学図書館所蔵本による。
11）注10と同じ。
12）注7と同じ（「滝沢馬琴の蒐集校訂本『白石叢書』」、71～77頁）。
13）武藤元昭「『馬琴日記』—滝沢家の記録保存—」（『国文学　解釈と鑑賞』至文堂、1985年7月）。
14）高牧實『馬琴—家の江戸暮らし』中央公論新社、2003年。
15）服部仁「『馬琴日記で知られる著述生活は〈戯作三昧〉だったのか』」（『国文学　解釈と教材の研究』学燈社、1993年2月）。
16）桑山竜平「馬琴日記と水滸伝」（『天理大学学報』天理大学学術研究会、1975年3月）。
17）石村義典「『馬琴日記』のなかの松前」（『北海道史研究』28、北海道史研究会、1981年12月）。
18）武藤元昭「馬琴日記はなぜ書かれたか」（『国文学　解釈と教材の研究』学燈社、1977年9月、155頁）。
19）『馬琴日記』の引用は、暉峻康隆他校訂『馬琴日記』第1～第4（中央公論社、1973年）による。
20）植田啓子「曲亭馬琴の対外関心について」（『国文学　言語と文芸』42、大修館書店、1965年9月、38頁）。
21）『兎園小説拾遺』日本随筆大成〈第2期〉5、吉川弘文館、1974年、103～108頁。
22）播本眞一「曲亭馬琴伝記小攷—曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川畳翠旧蔵本『松窓雑録』について—」（『読本研究新集』第2集、翰林書房、2000年、159～163頁）。
23）注20と同じ（45～46頁）。
24）ハワイ大学図書館蔵『江戸期琉球物資資料集覧』第4巻、本邦書籍、1981年、525～530頁。

＊討議要旨

小峯和明氏は、①琉球、朝鮮、蝦夷などを〈異国〉として一括りに捉えているが、対外意識の温度差は見られないのか、②〈異国〉の問題を馬琴は創作の中にどう生かしたのか、『椿説弓張月』以外の作品からも〈異国〉の要素は認められるのか、と尋ね、発表者は、①馬琴には諸外国を明確に区別する意識はなかったのではないか、②『椿説弓張月』以前から異国風の作品は執筆されているが、『椿説弓張月』以降、江戸幕府の取締りもあり、見られなくなる、と答えた。

ロバート・キャンベル氏は、『馬琴日記』に記された松前藩の情報や風聞はどのように収集されたものなのか、と尋ね、発表者は、馬琴のもとに松前藩関係者が出入りしていた、と答えた。

王益鳴氏は、レジュメに引用されている「高野山事略」とはどのような内容であり、〈異国〉と関連する書物なのか、尋ねた。

武井協三氏は、『白石叢書』の書き込みはすべて馬琴によるものと認定できるのか、と尋ね、発表者は、わずかに例外もあるが、ほとんどは馬琴の筆跡として確認済みである、と答えた。